

第14期教学研究so 閉所式 研究生答辞



2012年10月に開所されました第14期北海道教学研究soも、今日で約3年の学びを終え、閉所となります。この3年間研究生一人一人がそれぞれに悩み、苦しみ、立ち止まり、右往左往しながらも、今日を迎えることができたのは、ひとえに様々な方々の支えがあったからこそであると思います。

入所した当初、まず私が驚かされたのは、この学びの環境の素晴らしさでした。教研室、寢室、トイレ、シャワー室、どの部屋も新しくきれいで快適で、おまけに空気清浄機と加湿器まで完備されていました。教研室には毎回、私たちが一日飲んで足りるほどの大量の番茶が用意されておりました。荒川さんには私たち全員が大変お世話になりました。また、法務に追われて大変多忙であるにも関わらず、私たちのレジュメのコピーを快く引き受けて下さる教務soの所員の皆さんがいらっしゃいました。毎回のフリートーキングでの酒代は支給され、そのうえ研究手当までいただけるという、この教研に入所する数年前に専修学院に行っていた私にとっては、本当に信じがたい環境でありました。

亀谷so長は入所式で、あるいはその後の青葉祭等の飲み会の挨拶で、「私たちが今日いただくお酒や食事には、全国の御門徒さんの願いが込められています。そのことをどうか忘れないで下さい。」というお話をよく私たちにして下さいました。これはその一時の飲み会のことにとどまらず、私たちの3年間のすべてが様々な方々の願いによって、私たちの前に用意されたものであるということであったと思います。少しでも良い環境をと学びの場を受け継いで下さった先輩方、先にも述べましたが、いつでも快く私たちのお世話をして下さいました教務soの皆様、そしてまた毎月3日間お寺を空けること、家庭を離れることでかける迷惑とその負担を、文句を言いながらも引き受けて、送り出してくれた家族、御門徒さん。そういう数え切れないほどのたくさんの方々が、願いを持って関わって下さったということ。「どうか学んで下さい。そしてあなたが教えに生きる姿をもって、私たちに教えて下さい。」という願いを持ってたくさんの方々が支えて下さって、私たちは学ばせていただいたことであります。

亀谷所長の先の言葉に「私は今まで、願いを受け取れるほど深く人を見つめたことがあったらどうか。」と問われました。そう問われたとき「実は人の話を聞くフリをしながら、人を押しつけて自分を優先させてきたのではなかったか。」「他者を踏みつけにして自分が楽をしたかっただけではなかったか。」そんな答えしか浮かんできませんでした。そしてその思いが人との関係を断ち切らせてきたのだと思います。その亀谷所長の言葉は厳しく問いながらも「どうか他者の願いを受け取っていただけるあなたになって下さい。他者と出遇っていただけるあなたになって下さい」と優しく響く言葉であったなと今感じています。



教研生の皆さん、3年間はどうかだったでしょうか。私の3年間は、何も変わったところはない、勉強も十分にできたとは言えないというのが正直なところです。しかし本当に良かったな思うことは、やはり先生方と出遇えたことです。

ここ数ヶ月は教研レポートの作成に全員が追われていました。フリートーキングの合間にも個人面談が行われ、それは深夜まで及びました。4月に行った上山研修でも、休憩時間や自由時間を使ってミーティングが開かれていました。私自身も今までこんな枚数は書いたことがないというほど、何度も何度もレポートを書き直し、また戻されという繰り返しでした。個人面談も行っていただき、電話のやりとりも夜遅くまでしていただきました。そのことの意味を改めて思い返し、有難かったことは、それに付き合ってくれた先生がいたということです。一緒に立ち止まって、私以上に寝る間を惜しみ、私以上に私のことを考え、見抜いて下さった先生がいたということです。

先生との出遇い、それは見捨てない心との出遇いであったと思います。何度聞かされてもわからず、すぐにしゃがみ込もうとする私たちに、最後まで見捨てず願いを持って寄り添ってくれる、そういう心と私たちは出遇わせていただいたのだと思います。そしてその心と出遇った者は、今度は自分がその心を大切に生きていく歩みが始まるのだと思います。

私はこの3年間、皆さんの前でお話できるほどの学びをしてきたとは言えませんが、1つだけ感じていることがあります。それは「願いというものの温もり」であります。願いには人肌の温もりがあるのだと思います。私は問われるということがなければ、いついかなるときでも自己関心のみで大切な人をも切り捨てていくような者であります。その心は血の通わない、冷たい石のようであると言わざるを得ません。しかしそんな私が計らずも願いに触れるとき、自らの姿への痛みと共に、石のように固く冷たい心に風穴が開けられ、温もりが注ぎ込まれる。人としての温もりが回復されていくのだと思います。この3年間とは、すぐにでもその温もりを忘れてしまう私に、先生方が、仲間が、そして14期教研を支えて下さったすべての方々が呼びかけ続けて下さったのだと思います。

先月の集会で、私たち14期にもOB会が発足することが決まりました。名前を「風穴の会」といいます。私たちの学びはまだ続きます。私はこの風穴の会を、師友から再び呼びかけられながら人としての温もりを確認しあう場として、大切に関わらせていただきたいと思います。

最後になりますが、改めて3年間私たちを見捨てることなく、願いを持って寄り添って下さった亀谷所長、波佐谷先生、中野先生、朝日先生、赤松先生、伊藤先生、また今日まで私たちの学びを支えて歩ませて下さいました北海道教務所の皆様ならびに北海道教区関係者すべての皆様方へ、

第14期教学研究所研究員

石澤亮介、奥田和寛、黒萩 廣、佐竹雄志、石塚智彦、巖城孝行、圓浄照康、宮本浩尊、秋山 智、畠平 諭、曾我了導、竹村貴士、畠山智光、伊藤 了、中村法暁、橋本正暁、野原量慧、岩城 昌、松澤正樹、赤松 到、ここに深く感謝の意を表し、答辞とさせていただきます。

ありがとうございました。

2015年6月12日

第14期北海道教学研究所研究員 北第3組 浄秀寺 石塚智彦

